OVATION

NEW WORLD OF ACOUSTIC GUITAR

1966年、新素材を使ったラウンド・バック・ボディという斬新なアプローチで、アコースティック・ギター界へ果敢に切り込んでいったオベーション。発表当初はそのあまりの革新性ゆえ、保守的な人々からは厳しく批評されたものの、これに続くエレクトリック化をきっかけとして、まもなく世界中のトップ・ギタリストたちに愛用されるようになった。そして今やオベーションは、エレクトリック・アコースティック・ギターのスタンダードとしての地位を確立するにいたっている。

PATRIOT 1664

アメリカ建国200年記念モデル、パトリオット。バイセンテニアル・イヤーに合わせて1万枚のみの製作という限定モデルだ。写真のギターは、さだまさし氏の所有品。73年にアメリカでレコーディングに行った時に購入したそうだ。

建国記念モデルとあって、ボディ・トップに星条旗がワン・ポイントで飾られている。

ADAMAS PROTOTYPE

オベーションの中で最も実験的な要素を含んだギターであるアダマスは、このプロトタイプを経て現在の形となった。驚くことに、試作段階ではトップ板がメープル、カーボン・グラファイトは採用されていなかったことが確認できる。

R A R E　C O L L E C T I O N

ここでは限定モデルや特別仕様、製造中止モデルを御紹介しよう。

C O L L E C T O R S　S E R I E S

82年〜94年までのコレクターズ・シリーズを全15本一挙に公開！

コレクターズ・シリーズはレギュラー・モデルにはないボディ・フィニッシュやポジション・マーク、使用材などを盛り込んだ各年ごとの限定モデルだ。特徴的なものをいくつか挙げると、今では代表的なオペーション・カラーとなっているバーンボード・フィニッシュが初登場した82年モデル(中)、18フレット・ネック・ジョイントの限定モデル(中)、創立25周年を記念しオペーションの内製第1号モデル、バラディーアを現代風にアレンジした93年モデル(中)といったところがある。そして今年発売された94年モデル(中)ではチューナー・ウノッチ・フィルターを内蔵した新型プリアンプが採用されており、新たな方向性を見せてくれた。

A D A M A S

美しい外観の裏に秘められたオペーション・テクノロジーの集大成、アダマス。

SUPER ADAMAS 1687-9

サウンドホールの位置と数、カーボン・グラファイトを採用したトップなど、あらゆる要素でアコースティック・ギターの常識を覆したアダマス。その表現機種にあたるのがスーパー・アダマス。今もなおあまくのミュージシャンを虜にしているオペーションの傑作。

ADAMASII 1581-5

スーパー・アダマスの発表から7年後に登場したアダマスII。写真のモデルは、カッタウェイ部にエボーレット（サウンドホール周囲の装飾）のない廉タイプ。

ADAMASII 1881-NR2

カッタウェイ部にサウンドホールのある新タイプ。アダマス・シリーズでは、アダマスIIに続くスーパー・シャロウ・ボウルが用意されている。

Head

スーパー・アダマスには鼓巻き状の彫刻が入る。

アダマスIIはレギュラー・シリーズ同様のデザインだ。

アダマスIIの12弦仕様のヘッド。

Neck

スーパー・アダマスは2ピースのウォルナットを使用。

アダマスIIはメイプルとマホガニーのラミネート。

Position Mark

スーパー・アダマスには黒い装飾が入る。

ポジション・マークには高機種共にメイプル材を使用。

Sound Hole

何種類かのエキゾチック・ウッドを使用。

エボーレットの色は何パターンかある。

Bridge

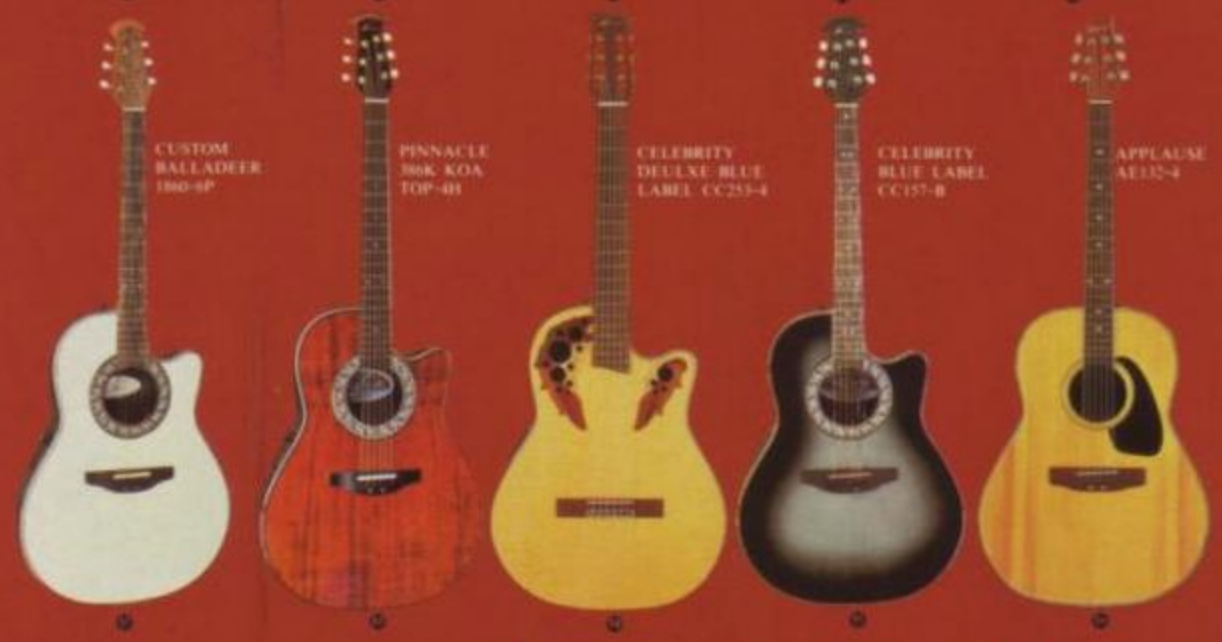
装飾や弦の止め方に違いが見られる。

材はウォルナットが使われている。

アダマスIIの12弦仕様のブリッジ。

R E G U L A R L I N E U P

高級モデルから廉価モデルまで、バリエーションが豊富なところもオベーションの魅力だ。



ここではオベーションの代表的な市販モデルを集めてみた。❶はキルテッド・メイプル・トップのクラフトマン・リミテッド。❷はラウンド・ホール・タイプの上級機カスタム・レジェンド。アル・ディメオラがこのモデルのディープ・ボウルを長年愛用しているのは有名だ。アダマスのウッド・トップ・バージョンが❸のエリート。❹はバット・メセニー、天野清継が好んで使用しているクラシックのカッタウェイ・モデル。オベーションの中で最もスタンダードなのが❺のレジェンド。❻はオベーションの市販モデル第1号であるバラティーアに現代のプリアンプを搭載したモデルだ。❼―❾はオベーションの廉価モデル。この中でも❼はエボーレット・サウンドホールでナイロン弦というと廉価版にはない仕様である。

E L E C T R I C G U I T A R

一部のマニアに人気のあるオベーションのエレキ

アコースティック・ギターの影に隠れて、意外と知られていないオベーションのエレキ。約一年という短い期間にしか生産されなかったが、最新のテクノロジーが導入されたユニークな楽器だった。当時に発表された❶はその最たるもので、新鮮なシェイプで内蔵されたFETプリアンプは当時としては進みすぎていたのかも知れない。ちなみにスタインバーガーのクライン・モデル開発、スティーブ・クラインがデザインを担当した。❷はニール・ショーンがジャーニー在籍時にメイン・ギターとして使用していたUK II。❸も細かいところを見るとリアPUのポールピースがスラントしたりして面白い。❹はなんとグライコ内蔵のベースだ。

OVATION
NEW WORLD OF ACOUSTIC GUITAR

Bill Kaman Interview

航空機の製造を営んでいたカマーン・コーポレーション社が66年にギターの製造を開始し、オベーションは生まれた。音楽とは無縁の会社がここまでこの業界で成功を収めたことは今後も語り草となることだろう。これらの偉業を成し遂げた創立者チャールズ・カマーンはすでに現役を退いている。後継者である子息、ビル・カマーンが、この先オベーションをどのように発展させていくか、楽しみである。

Interpretation : Kayoko Takahashi

●あなたのお父さん、チャールズ・カマーン氏が音楽業界への進出を決めた理由を教えてください。

○会社の業種を広げようと考えて音楽業界に進出した。ヘリコプターの製造から始めて航空関係のビジネスを展開してきたが、一般の消費者に直接働きかけられるような製品を作り、さらに新しい市場を開拓したかったんだ。我々が航空業界で培った技術や方法論が応用できる分野を探してみると、ギターもそのひとつだということがわかった。それで54年からギターの開発を始め、66年には初の製品を市場に出したんだ。それに父がギタリストであったことも理由になるだろう。昔からずっと興味の対象であったギターをビジネスにすることが可能であるならやってみようということになった。

まず最初に我々はギターを作るにあたり、ボディ・バックにファイバーグラスを使おうと考えた。木だと乾燥して割れたり、壊れやすくなる。父はずっとマーティンを弾いていて、サウンドは気に入っていたが楽器の持つ問題点も承知していた。それで困った経験もあったみたいだからね。それでよりよいギターを作りたいと考え、ファイバーグラスの利用を思いついた。ラウンド・バックにしたのも強度の高まる構造だからだ。それ自体に十分な強度があるので内部のブレーシングを必要としない。しかも一体成型が可能だ。スクエア・バックだといくつかのピースに分けて成型しなければならないけれどね。最初の試作品2、3本はスクエア・バックだったが、ラウンド・バックのメリットに気づいて作ってみると、サウンドも我々が求めていたものにぐっと近づいた。市販モデルを作るまでに、プロトタイプを30〜50本くらい作ったよ。

●具体的にどんなサウンドを求めていたのですか？

○バランスのとれたサウンドだね。ベース、ミッド、トレブルのすべてでいいサウンドが得られるもの。ひいては、ブルーグラス、カントリー、その他どんな音楽でも使えるサウンドだね。

●あなたもギターを弾きますか？

○少しね。初めて音楽に魅かれたのは、64年にエド・サリヴァン・ショーでビートルズを観た時だった。僕も音楽をやるんだと決心して、最初は家にあったドラムを、そのあとまもなくギターを弾きだした。オベーションのごく初期のサンプルが初めてのギターだった。すでにそれより新しいプロトタイプができていたので、古い方を貰ったんだ。ネックはマホガニーとメイプルの3ピースで、ラウンド・バックにスプルース・トップ。最新カタログに僕がこのギターを持った写真が載ってるよ。

●ギターの開発を始めたお父さんを見て、あなたはどう思いましたか？

○楽しいビジネスだと思ったな。音楽自体楽しいし、音楽作りに関わる人たちとの交流もエキサイティングだ。自分たちのギターが、多くの人が聴く音楽を作り出すミュージシャンの役に立っているのを見ると、本当にギターを作ってきて良かったと思うよ。

●お父さんはギター製作に必要な知識や技術をどうやって学んだのですか？　航空関係の技術以外に新しく覚えなくてはならないこともあったでしょう？

○父はエンジニアリングを学び、エンジニアになった。だからその応用で、いいサウンドに必要な要素やギターを弾くことによってギターにかかる力や動きなどを調べていた。ギターの機械的な面に関しては、我々に協力してくれた人がいる。趣味でバイオリンやマンドリンを自作していた人でね。そのあとギター作りの基礎的なことを知っている人たちも入ってきてひとつのチームができた。チーム全員でギターを作っていったよ。ネックの形、フレットの間隔などに関してはチームの人が考えたが、ギターのデザインやサウンドはすべて父が考え出した。父はギターがどうあるべきかを知っていたからね。それから製品の最終チェックも必ず自分でやってたよ。

●最初の市販モデル、バラディーアを発表する以前にプロのミュージシャンの意見を聞いたりしましたか？

○いや。発表後に聞いたんだ。

●バラディーアに用いられた素材はなんでしたか？

○今使っているスタンダードな素材と同じだよ。ボディはスプルース・トップで、バックがファイバーグラスだ。ネックはマホガニー、指板がエボニー。そしてブリッジがウォルナットだ。

●バラディーアは最初、アコースティックでしたよね。インサイド・ブリッジ・ピックアップを内蔵したエレクトリック・アコースティック・バージョンはいつ頃から製造されたのですか？

○67年頃だったと思う。

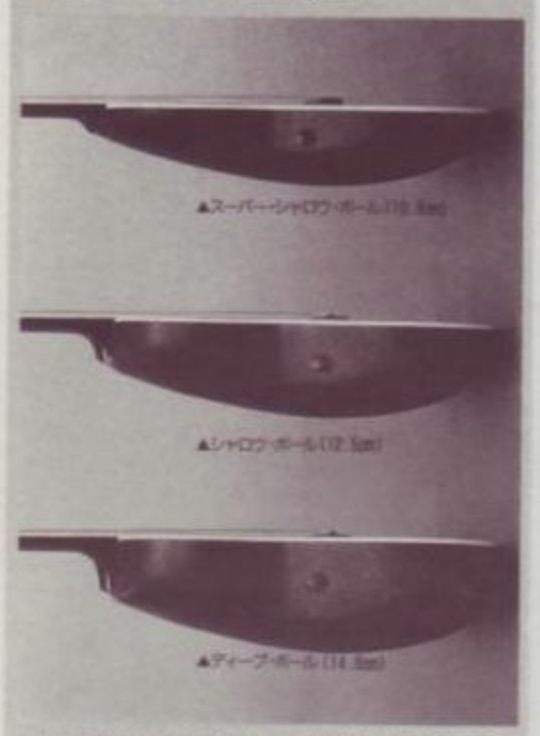
●最初にピックアップを付けてほしいと頼んできたのはグレン・キャンベルだったそうですね？

○そうだ。彼がテレビに出る時、彼とカメラの間にマイクを立てなければならなかったんだが、立てすにすむ方法はないかと聞かれたんだ。マイクを使わずにプレイできるピックアップ・システムはないかとね。

●ブリッジに取り付けるタイプのピックアップを最初に

オベーションの生みの親、チャールズ・カマーン（左）はプロから誘いを受けるほど優れたギタリストだった。

OVATION SECRETS #1
ROUNDBACK BODY



ボディ内の音の流れが良く、しかも優れた強度を誇るラウンド・バック・ボディ。特殊樹脂加工のグラスファイバーを基礎材とした"リラコード"がボウル部に採用されている。ボディ厚は、鳴りを重視したディープ、グレン・キャンベルのリクエストにより作られたシャロウ、ライブ・パフォーマンスで威力を発揮するスーパー・シャロウの3タイプ。

作ったのはオベーションだったのですか?

○う〜ん、当時開発されていたものが少しはあったはずだ。30〜40年代にその手のものがあったんじゃないかと思う。だが商業的な成功を収めたのはオベーションが最初だろうね。

●マグネティック・ピックアップでなくピエゾ・ピックアップを選んだのはなぜですか?

○アコースティック・ギターの弦はだいたいブラスやブロンズでできているからマグネティック・ピックアップではうまく拾えないんだ。エレクトリック・ギターはニッケルやスティール弦がほとんどなのでマグネティック・ピックアップの方が都合がいいけどね。あとピエゾをブリッジに入れると弦の放つエネルギーをすべて拾える。しかも材質とは無関係にね。

●インサイド・ブリッジ・ピックアップの開発にまつわる話を少し聞かせてください。意外な発見や苦労したことなどありましたか?

○このデザインのおかげで、よりよいサウンドが得られることがはっきりした。弦の振動に加え、ギターのトップの振動も拾えるからだ。2ヵ所からサウンドを拾い、プリアンプを通すと実に素晴らしいサウンドが得られた。

●79年に登場したカマーン・バー(P60コラム参照)はどのように開発したのですか?

○初期のアプローズや、アルミ・ネックのマトリックスなどと共に開発した。アルミ・ネックという異素材を導入する過程で出てきたアイディアなんだ。アルミ・ネックの一体成型のアイディアがもとになっている。

●カマーン・バーとトラディショナルなトラスロッドの大きな違いはなんですか?

○調節力は他のと同じくらいだが、カマーン・バーを入れるとネックの強度が約4倍になる。気候の変化などに強くなるだけでなく、振動がボディに伝わりやすくなり、いいサウンドが得られることもわかったよ。

●アダマスはいつ頃開発を始めましたか?

○74年頃だね。発表されたのは76年で、アトランタ・トレード・ショーに出展した。

●エポーレット・サウンドホールのアイディアはどのようにして生まれたのですか?

○カーボン・グラファイトのトップにさまざまなブレーシング・パターンを試していて、サウンドホールを移動させる必要が出てきたんだ。それで上方にずらした一連の小さな穴は、トップを振動させ続けるために空けてある。例えばFホールを空けるとトップは穴の周辺でのみ振動し、サウンドの特徴を変えてしまう。関連性のある小さな穴をいくつか空けると、自然な振動を妨げない。アダマスのブリッジやペグ・ヘッドのカーブ、サウンドホール周辺のデザインなど美的な部分は、このプロジェクトに関わったインダストリアル・アーティストが担当したんだ。

●アダマスは当初、木のサウンドボードを使うつもりだったのですか?

○いや。サウンドボードには常にカーボン・グラファイトを想定していた。そのあとエリートでスプルースのサウンドボードが登場したが、ブレーシング・パターンやサウンドホールのパターンは変わっていないね。エリートは79〜80年に発売された。

●ファイブロニック・サウンドボードはどのようにして開発されたのですか?

○スプルースの振動特性を再現できる素材を我々は求めていた。というのもスプルースはだんだん入手困難になり、高価になってきた。しかも取り扱いに注意しないと割れてしまう。それにいったんデザインを決めてしまえば、カーボン・グラファイトだと同じものを安定して作れる。これはギター同士の個体差が少ないことを意味する。木だと、どんなに同じ木の隣接している部分を使って作っても、サウンドがまったく違うことがあるからね。

●アダマスの開発にあたって、ユーザーとして特定のミュージシャンを念頭に置きましたか?

○特にないな。当時グレン・キャンベル、ラリー・コリエルらが我々に協力してくれていたが、特定のミュージシャンに向けて作ってはいないよ。

●アダマスではユニークなブレーシング・パターン、クインタッド(P59コラム参照)が採用されていますが、他にどんなパターンを試しましたか?

○いくつか試した中から幅広い音楽性をカバーするのに一番ふさわしかったパターンがクインタッドで、結果的にこれを市販モデルに採用したよ。

●ウォルナットを指板やブリッジに採用しているのは理由がありますか?

○ウォルナットとギターの持つ要素の相互作用が気に入っているんだ。音質も優れているしね。ウォルナットはおもにアダマスに使うが、オーダーによっては他のモデルでも使うよ。

●5ピース・ラミネート・ネックは、強度を高めるために採用したのですか?

○そうだ。マホガニーが音質の点からも業界で標準的に用いられているが、メイプルを挟むことにより強度が高められる。また外見も綺麗だ。

●ネックの形はどうやって決めたのですか?

○長年、いろんな人から話を聞いたのをもとにして作ったんだ。

●ナイロン弦のモデルは、ジェリー・リードの求めに応じて作ったのですか?

○68年からナイロン弦のギターはあった。グレン・キャンベルのTV番組にジェリー・リードが時おりゲスト出演していて、ふたり共これを弾くようになった。ピックアップ内蔵のナイロン弦ギターは、たしか最初はグレンのために作り、そのあとジェリーにも作ったんだと思う。

●一時エレクトリック・ギターやベースも作っていましたが、何年にどのモデルが出たか教えてください。

○ディーコンとブレッドウィナーが初のソリッド・ボデ

OVATION SECRETS #2 PREAMP/CONTROLL

オベーションのプリアンプの変遷をコントロール部から見ることにしよう。①:初期のモデルは1ボリューム・タイプでボディの肩部にコントロールがあった。②③:トーンが増設され、コントロールがボディの低音弦側のくびれ部の位置にくる。ボリュームとトーンが別々の②と、同軸2連ポットを使った③のふたつの仕様があった。④:85年から現在のモデルまでに搭載されているOP-24。1ボリュームに3バンドEQという仕様。⑤:94年コレクターズ・モデルに搭載されたニュー・プリアンプ、オプティマ。最新機能は、a)EQは4バンド b)バイパス・スイッチによりEQのオン/オフが可能 c)フィードバック・ポイントを捉える可変式ノッチ・フィルターを内蔵 d)オート・クロマチック・チューナー内蔵、など。

OVATION SECRETS＝3 BRACING

オベーションの独特なブレーシング・パターン。⑥のクインタッド・ブレーシングはアダマス、エリートといったエポーレット・サウンドホール用で、⑦のAブレーシングはカスタム・レジェンドを始めとするラウンド・ホール・タイプに採用。どちらも、ボディの横に渡る力木がほとんど入っていないのが特徴だ。

ィのギターで、69〜70年頃に発表した。2年しか製造しなかったがね。その次がヴァイパーとプリーチャーで、これは3年くらい作っていた。この頃ベースも登場し、これらも2〜3年は作ったよ。それがマグナムIとIIだ。それから80年にUK（ULTRA KAMAN）IIとマグナムIIIベースを出したのかな。我々のエレクトリック・ギターはクオリティの高さ、音質の良さは認められたが、どのモデルも商業的に大成功を収めるには至らなかった。どこかアピールに欠けていたのかもしれないね。すべて82年か83年に製造中止になった。

●ブレッドウィナーやディーコンはスティーブ・クラインがデザインしたのですか？

○そうだ。彼が今作っているギター（編注：クライン・ギター）もディーコンに似ているだろ。あのデザインは弾き心地がいいんだろうな。

●エリートの開発意図は？

○エリートはアダマスのトップを木にしたものだが、アダマスのテクノロジーを木に応用したんだ。

●ボディにはディープ／シャロウ／スーパー・シャロウの3種類がありますが、シャロウからさらにスーパー・シャロウを作ったのはなぜですか？

○ステージでの弾きやすさを考えた。それにサウンドも少し違うから、音の好みで選ぶこともできる。

●コレクターズ・シリーズや限定モデルの中で、あなたが個人的に好きなギターをあげてください？

○83年のコレクターズ・シリーズ。それから84年のコレクターズ・シリーズのプロトタイプを持っているんだが、これはいつも弾いてて、気に入っているよ。この2本が僕のメイン・ギターだ。

●アプローズやマトリックスなど廉価モデルを発表したのは、オベーションを弾いてみたいけれどこれまでは買えなかった人のためですか？

○基本的にはそうだ。初心者や学生にも弾けるようにするためだ。

●アプローズにアルミ・ネックを採用した理由は？

○強度の高い素材だから、トラスロッドがいらない。それに内部構造から指板まで一度に型に入れて作れるのもいい。

●その後アルミ・ネックをやめたのはなぜですか？

○81年頃、廉価モデルの製造部門を海外に移したんだ。

TALK ABOUT OVATION GUITARS

ゴンチチ

ゴンザレス三上　・　チチ松村

●初めてオベーションを弾いたのは何年前ですか？

○6年前。

●使うきっかけは？

○ライブでバック・バンドと一緒に演奏する時に、ハウリングをさせないため。オベーションはほとんどハウリングしないから。

●最初に使ったオベーションは、なんというモデルですか？

三上：クラシックのカッタウェイ・タイプ。

松村：レジェンド。

●初めてオベーションを弾いた時の印象は？

○弾きやすいと思った。

●オベーションを使い続ける理由は？

○やっぱりライブの時に大音量でやってもハウリングしないからかな。

●現在、何本オベーションを使っていますか？

三上：クラシック・モデル3本と12弦1本。

松村：スティール弦タイプを4本。

●その中で一番よく使うモデルは？

三上：クラシック・モデルのカッタウェイ・タイプ。

松村：エリートのカッタウェイ・タイプ。

●ライブとレコーディングのどちらで使うことが多いですか？

○ライブ主体。

●ライブとレコーディングでの使用法を教えてください？

○ライブはストレートに卓へ、ラインのみで。レコーディングは、ラインとマイクの両方を同時に録音している。

●サウンドホールはラウンドとエポーレット・タイプがありますが、どちらが好きですか？

三上：ラウンド・ホール。

松村：エポーレット・タイプ。

●カッタウェイ・タイプとノン・カッタウェイがありますが、どちらがお好みですか？

○カッタウェイ・タイプ。

●ボディの厚さはディープ、シャロウ、スーパー・シャロウの3種類ありますが、どのタイプが好みですか？

○ディープ・ボウル。

●今後欲しいモデルなどはありますか？

三上：12弦とクラシック・タイプのダブル・ネック。

松村：ウクレレとスティール弦のダブル・ネック。

●すばりオベーションの魅力は？

○音量をでかくしてもハウらないこと。

OUTRAGE
御用達の店!!

OUTRAGEの岡部です。安井です。俺達がいつも使っている楽器はESPなんだ。このギターは俺達が一番信頼しているクラフトマンがこの店にいて、設計から製作まで、安心して頼めるからいいんだな。Body材からパーツまで何を使うかクラフトマンと一緒に決められるから安心だ。サウンドもバッチリだし、何より丈夫なのがいいよ。ホント。

オーダーメイド製作工程は材の選択から始まります。設計が良くても、加工精度が良くてもそれだけではいけません。基本は材です。実際に見て、さわってお客様の御希望に合わせて選択します。ギター、ベースの表現力を最大限に引出すサウンドの要です。

Pro Ceed FORCE BASS
¥450,000〜　オーダー受付中

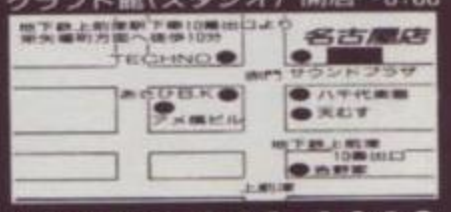
ESP　PRO CEED

月々3000円からクレジットOK
頭金ナシ、1〜60回払いまでOK

尚、万一の事故に備えて、当社のオーダーメイド製品は全て損害保険のサービスを行なっています。（無料）

各種改造、リペアもいたします。
資料請求はハガキにてどうぞ。

Big Boss 名古屋店
クラフトカン
月〜土　10:30〜19:30　（年中無休）
日・祝　10:00〜19:00
クラフト館（スタジオ）開店〜0:00



☎052-242-0062
FAX 052-242-0065
名古屋市中区大須4-2-47

OVATION SECRETS #4 KAMAN BAR

カマーン・バーは、トラスロッドを特殊アルミの枠の中に入れた構造となっている。⑤のようなこっついブロックが⑥のように入っていることからも、ネックの強度が優れていることがわかっていただけるだろう。またカマーン・バーとボディのボウル部はボルトで固定されており、ネックとボディとのジョイントの役割も果たしている。

韓国に移したんだが、あちらでは伝統的な製造方法が通していたんで変えたんだ。

●新しく開発したオプティマ・プリアンプとニュー・ギターのヴァイパー（編注：前出のエレキと同名でまったく違うモデル）を紹介してもらえますか？

○オプティマ・プリアンプは、94年のコレクターズ・シリーズの一環として発表した。このプリアンプは、より幅広いトーン・コントロールが可能になっている。またクロマチック・チューナーを内蔵しているので、ピッチをA=440に正確に合わせることが可能だ。それにバンドでのプレイで、必ずしも正しくないピッチのキーボードに合わせることもできるんだ。そのずれたピッチをチューナーに入れておけば、演奏中にチューニングが狂ってもずれたピッチに合わせて直せるしね。

ヴァイパーはステージでのプレイにおいて、ギタリストの要求を満たすギターだ。つまり、ステージではできるだけハイ・ボリュームが得られるようにしたいだろう。シン・ラインのボディで、アコースティック・サウンドを得るため、ホロー構造になっている。ボディが薄い分、フィードバックの問題が解消された。それに18フレット・ジョイントだからプレイしやすく、エレクトリック・ギターのプレイの感じに近い。オベーションでは普通14フレット・ジョイントだからね。この18フレット・ジョイントのコンセプトは88年に生まれ、コレクターズ・シリーズに採用されたよ（編注：86、88、90年モデル）。それから専用のプリアンプも作った。これはヴァイパーの特性を最大限に引き出すプリアンプなんだ。

●オベーション以外で好きなギター、あるいは気になるギターはありますか？

○興味深い会社というのは、そこで働く人たちの姿を反映していると思う。例えばマーティンは素晴らしい会社だが、クリス・マーティンも同様に素晴らしい人物だ。テキサスのコーリングスは高価だがとてもいいギターを作っていて、ビル・コーリングスもいい人だ。サンタ・クルーズも、社長のリチャード・フーバーは素晴らしい。

●そしてオベーションにはカマーン親子がいて、最高のクラフツマンシップが存在すると。

○そうありたいと思って常に努力を重ねているよ。また会社のイメージがアコースティック・ギターと結びついていて、エレクトリックの方が成功しないのならアコースティックに専念しようとも考えている。エレクトリックの方はヘイマーとの関わりで出していけるようになったことだしね（編注：ヘイマーは現在カマーン・コーポレーションの傘下にある）。ヘイマーも真心を持った優秀な人々の集まりで、優秀なギターを作っているよ。

●差し支えなければ、今後どんな製品を開発したいか教えてください。

○新製品で好評なのはエレクトリック・アコースティック・マンドリンだ。アメリカで今年発売し、プロの間でも評判になりつつある。マーク・オコーナーもプロトタイプを持っているよ。アンプに通しても、マンドリン本来のサウンドが忠実に再現できる。それからロング・スケールの12ギターも作るよ。フレットが従来のギターよりふたつ多いんだ。スケールはたしか28 1/2インチだったと思う。チューニングは12だ。2フレットにカポをはめれば、普通のギターと同じチューニングで弾ける。スケールが長い分トーンも変わっているんだ。

あとヘイマーのデュアル・トーンも好評だ。スプルース・トップのホロー・ボディ構造で、ピックアップ・システムがふたつ入っているんだ。ひとつはヘイマーのもので、もうひとつがイン・ブリッジ・タイプのオベーションのピックアップだ。このギターにはヴァイパーに装備したプリアンプと似たものが付いているよ。つまりヘイマーのエレクトリックとオベーションのアコースティックが完全に独立しており、ステージでギター2本分のプレイができるわけだ。

●あなたから見てオベーションのサウンドを最もよく生かし、活用しているギタリストの名前をあげてもらえますか？

○たくさんいるな。ラリー・コリエル、エイドリアン・レッグ、アル・ディメオラ、ナンシー・ウィルソン、ジョン・ボン・ジョヴィ、リッチー・サンボラ、メリッサ・エスリッジ、ジョアン・[illegible]。数日前に観たエリック・クラプトンのライブでは、ベースのデイヴ・ブロンズがオベーションのアコースティック・ベースを弾いていたよ。非常に面白いサウンドだったな。

●マーティン、ギブソンなどビンテージ・アコースティック・ギターのブームをどう思いますか？

○ギターへの関心が高まるのはいいことだ。それに長年にわたってマーティンが成功した年は、我々にとってもいい年になるという現象が見られる。全体的にもポジティブな傾向だ。素晴らしいギターに触れることで、ギターという楽器に関心を持つ人も増えるだろうし。それに今では古いオベーションを集めている人だっている。

●オベーションのコピーが次々に出てしまうのをどう思いますか？

○何よりも我々が成功しているから、それに続こうと試みる人が出てくるんだろう。特許関係にも気を使っているんだがね。しかしその手の連中は我々の正しい意志と評判を利用して、ただ金を稼ごうとする。本当は人の真似などしなくたって成功できるのに。さまざまな会社が、それぞれ独自のデザインを編み出して成功しているのは、歴史的にも証明ずみだ。

●アコースティック・ギターの今後の見通しは？

○将来には期待できると思う。成長を続けるはずだ。そしていい未来が待っている。

●読者にひと言お願いします。

○ギターに興味を持った人は、これからも興味を持ち続けてほしい。あといろんなギターを研究することも大事だね。オベーションではサウンドやスタイルの異なるギターをたくさん作っていて、ほとんどの人の要求にこたえられるだろう。すでにオベーションを持っている人たちには、活発な音楽活動をしてもらいたい。そして何よりもみんなのサポートにとても感謝している。

TALK ABOUT OVATION GUITARS

天野清継

●初めてオベーションを弾いたのは何年前ですか？

○15年以上前。

●使うきっかけは？

○よく覚えていないが、矢沢永吉のツアーに出た時に使ったのがきっかけだと思う。

●そのオベーションは、なんというモデルか覚えていますか？

○マトリックス。

●初めてオベーションを弾いた時の印象は？

○ものによってそれぞれ音色が違っていたので、なんとも言えない。

●オベーションを使い続ける理由は？

○特に理由はない。

●現在、何本オベーションを使っていますか？

○5本。

●その中で一番よく使うのは？

○クラシック・モデルのスーパー・シャロウとディープ・ボウル。

●ライブとレコーディングのどちらで使用することが多いですか？

○ライブとレコーディングで使い分けている。

●ライブとレコーディングでの使用法を教えてください。

○ライブでは、ギター・アンプから出た音をマイクで拾っている。レコーディングでは、ほとんどスタジオのマイクのみを使用。それかギターの方に内蔵してあるサンケンのCOSマイクとミックスして使うこともある。テレビやラジオなどの録音ではサンケンのCOSマイクからプリアンプを通して使ったりもする。

●サウンドホールはラウンドとエポーレット・タイプがありますが、どちらが好きですか？

○ラウンド・ホール以外使ったことがない。

●カッタウェイとノン・カッタウェイ・タイプがありますが、どちらが好みですか？

○音色はノン・カッタウェイの方が好きだが、演奏上の都合でカッタウェイ・タイプを使うことがほとんど。

●今、欲しいモデルはありますか？

○12弦モデルと、アダマスのシャロウ・ボウルでナイロン弦タイプがあれば欲しい。

●ずばりオベーションの魅力は？

○オベーション独特の音色が魅力。

TALK ABOUT OVATION GUITARS

石田長生

勉強トリオ、BAHOはどちらもエレキ・プレイヤーが集まってできたアコースティック・ユニットである。そしてその両ユニット共にオベーションが使われていたのは何か理由があるのだろうか。石田長生にエレキ・プレイヤーから見たオベーションを語ってもらった。

●初めてオベーションを弾いたのは？

○かつて"勉強トリオ"というのを渡辺香津美と山岸潤史たちとやってまして、それをやり出した頃だから何年くらい前かな？　最初は持ってなかったから、香津美さんのポーヤのヤツを借りて、ライブをやったのが、たしか最初だと思いますね。

●それはどんなモデルだったか覚えてますか？

○それはアダマスじゃなかった。品番は忘れたけど、丸ホールのシングル・カッタウェイやった。

●弾いた印象は？

○そうやね、やっぱりエレキ・ギタリストにとって弾きやすいアコースティック・ギターという感じかな。弦高とかテンションが特にね。

●最初に買ったのは、なんというモデルですか？

○アダマスの1587。最初買った時、嬉しくってね。仏壇みたいなデザインやんか（笑）。部屋の隅に置いて、お線香立てて拝んでましたよ（笑）。

●現在何本オベーションをお持ちですか？

○アダマス、エリート、レジェンドの3本やね。

●その中で一番よく使っているのは？

○エリートかな。最初はBAHOの初期とかでもアダマスを使ってたんですよ。バランスもいいし、高音から低音までのヌケみたいのが非常に素晴らしくて、とにかくよく鳴るギターなんやけど。でもよく鳴るギター＝ハウリやすいギターなんですよね。BAHOって、ある程度音量を出すでしょ。そうすると鳴りすぎちゃってハウリやすいんですよ。それとアダマスよりエリートの方がハイ・ポジションが弾きやすいのね。だからBAHOのステージではエリートを使ってた。それでレジェントをサブにしていたのかな。でも今だにアダマスはレコーディングで活躍していますよ。アダマスはやっぱり高／中／低とバランスがいいのね。特に低音がいい。ベース・ラインなんかをやる時に、ブンブンに出てくれるから。自分の身体にも、その低音を感じるんよ。6弦とか5弦の開放とかね。ズーンと俺の乳首にも感じるくらいの低音が出るからいいですよ（笑）。エリートとレジェンドはやや中域が強いかなという感じがしますね。もちろん、そのふたつはボディがスーパー・シャロウだからやと思うけど。アダマスは深胴やしね。

●ライブとレコーディングでの使用法を教えてください。

○ライブの時はラインとアンプのミックス。アンプはローランドのJC。レコーディングでは生音を混ぜますね。むしろ生音中心かな。それでちょっとだけラインを混ぜるという感じ。オベーションの生音って奇妙な音がして面白いんですよ。

●サウンドホールはラウンドとエポーレット・タイプがありますが、どちらが好きですか？

○デザイン的にアダマス・タイプですね。あのサウンドホールが蜂の巣みたいやから、よく冗談で"蜂を飼っているんだ"って言うてますけど（笑）。あとアダマス・タイプの方が俺に似合うんじゃないかな。それと、生音の場合、アダマスやエリート・タイプの方が、中央にサウンドホールがあるやつよりも弾いている本人に生音が聴こえやすいような気がするんですよ。結局は上からギターの音を聴いているわけでしょ、ギターの真上に耳がくるわけだから。それでやや丸穴よりも聴こえやすいというイメージがあるのかな。

●カッタウェイとノン・カッタウェイがありますが、どちらが好きですか？

○カッタウェイですね。持っているのは全部そうですから。どうしても興奮すれば徐々に高域に行ってしまう身体ですから（笑）。

●ボディの厚さは3種類ありますが、どのタイプが好きですか？

○ライブでやる分には、ボディは薄い方がいいね。もともとエレキ・ギターを弾くケースの方が多いわけですから、身体に馴染みやすいというのがありますよ。

●ディープとスーパー・シャロウでは鳴りが全然違いますか？

○全然違うね。だからその分、スーパー・シャロウのやつはギターに内蔵しているイコライザーの方で低域部分をやや持ち上げますけどね。

●今、欲しいモデルとかありますか？

○う～ん、ハウらないアダマスが欲しいね（笑）。

●オベーションは、単音弾きとコード弾きのどちらに合っていると思いますか？

○モデルによって違うと思うけど。まあリード・メロが弾きやすいアコースティック・ギターであるということは言えると思うね。

●ネックの形はモデルによって違いますか？

○俺の持っているエリートとレジェンドはちょっと三角ネックっぽいのかな。ネックの幅も細くてエレキ・ギターっぽいんやけど、三角ネックやからまあ形状は違うよね。アダマスは正直言うて、手が大きい人の方が合うでしょうね。こっついから。幅というか縦の奥行きがけっこうありますからね。それとアダマスの木って凄く固い。

●最後にずばりオベーションの魅力は？

○普通のアコースティック・ギターよりも濡れているところがええかな（笑）。アコースティック・ギターの魅力は乾いた音じゃないですか。そういう意味で言ったら、オベーションの方が濡れているというか、音はエッチですよね。

石田長生はアダマス、チャーはエリートを使用。

ESP フルオーダーメイドシステム

本物のサウンドの証明

ギター、ベースの音に影響を与える要因のうち、80%がボディ材です。オーダーメイドで使用する材は5年以上のシーズニング期間を費した材のみを使用します。

プレイヤーのニーズに、100%応えた"本物"を作り続けるクラフトマンシップ。

ESP PRO CEED

★今月のハイライト★

大好評!! アーミング・アジャスター

Arming Adjuster ¥5,000

フローティングタイプのトレモロにありがちな、チューニングの不安定さを解消。チューニングした時に、他の弦がチョークダウンするのを防ぎます。取付けも簡単です。

CYBER JOINT

従来のボルトオンジョイントの約2倍の接着面積により、素材の鳴りを引き出し音のレスポンス、サスティーンetcが大幅に向上。また、ヒール部はスルーネックと同様の形状を採用することでハイポジションでのバッグンの演奏性を実現しました。

Big Boss 仙台店

モンキービジネス

平日　11:00～20:00
土・日・祝　10:00～19:00　（年中無休）

☎022-267-0495
FAX 022-264-4387
仙台市青葉区国分町1-6-3

OVATION HISTORY

文：寺崎誠

序文

今日、エレクトリック・アコースティック・ギター（以下エレアコ）の代名詞と誰もが認めるほどのオベーションですが、その歴史は現在の存在感を思うと非常に短いものです。そしてその理由は、当時のアメリカでの音楽形態の大きな変化が要求するギターの条件をオベーションがいち早く満たしたからではないでしょうか。過去のカタログを見ていてなるほどと思ったのですが、オベーションが初めてのラウンド・バック構造（ボディの胴裏部に角を持たない半球体のボウル構造：リラコードと呼ばれる合成樹脂による成型ボディ）のギターであるバラディーアを発表した67年の前年、アメリカではサイモン&ガーファンクルがロック・アレンジにリミックスした「サウンド・オブ・サイレンス」をヒットさせ、イギリスではクリームが結成されたとあります。60年代前半のフォーク・ムーブメントでのアコースティック・ギター1本の弾き語りスタイルから60年代後半のバンド・サウンドへの移行の中で、アコースティック・ギターのエレクトリック化は多くのアーティストにとって深刻な問題だったはずです。事実60年代後半から70年代前半にかけては後付けするタイプのコンタクトPUを貼り付けたアコースティック・ギターを弾くアーティストのライブ写真が多く見られますが、当時のPAシステムやEQなどの完成度は当然今ほどではなく結果も満足のいくものではなかったようです（逆に取り付け位置の違いやサウンドホールを塞いでハウリング対策するなど個々の独自のアイディアから、サウンドの個性は今よりもあったかもしれません）。加えて69年のウッドストックを頂点とするコンサート規模の拡大や野外コンサートの形態もアコースティック・ギターのエレクトリック化の必要性を強くした出来事だったと言えるでしょう。また、コンサート・ツアーが音楽産業においてビジネスとして定着してきたことで移動範囲が拡大し、気温や湿度などの極端な環境変化下でのアコースティック・ギターの使用も新たな問題として生じるようになりました。薄板で構成されたアコースティック・ギターがコンディションを崩しやすいのに対して、合成樹脂を使用したボディの方が一定のコンディションを保ちやすいという考え方も、オベーションがこの時期にアメリカのコンサート・シーンに浸透していった理由のひとつだったと考えられます。

カマーン・コーポレーションの楽器産業への参入

さて、独自の設計思想で衝撃的デビューを果たしたオベーションの小史をたどって見ましょう。オベーションの創始者チャールズ・H・カマーンは1919年ワシントン州に生まれ、10代後半の頃には地元のカントリー・バンドにプロのギタリストとして誘われるほどギターに熱中していたようです。結局、学業を優先したチャールズは大学卒業後ユナイテッド・エアクラフト社に入社。ヘリコプターのローター・ブレードの設計に従事し、45年に家族や友人と共に同業種カマーン・コーポレーションを設立。64年からアコースティック・ギターの開発を開始し、66年楽器産業部門としてオベーション・インストゥルメンツ・インコーポレーテッド社を設立。同年18ヵ月間の研究開発の成果である初のラウンド・バック・ボディ構造のギターであるバラディーアを発表しています。ここで今思い出しても笑ってしまう出来事なのですが、日本でオベーションがアマチュア・ギタリストの間でも知られるようになってきた70年代末頃、オベーションのラウンド・バック構造についてヘリコプター会社が不況で苦肉の策としてダルマ状のグラスファイバー部品を半分に割ったモノに板を貼ったら偶然音が良かったのでギターになったといったことがかなり真剣に話されていました。実際の発想の始まりは定かではありませんが、ヘリコプター関連の設計から得た振動に関するノウハウ（ローター・ブレードの防振化、居住空間の振動測定方法など）を応用し、それらのノウハウを持った技術者による開発への取り組み方は過去のギター・メーカーとはまったく異なるもので、それは初期のカタログでは測定の写真などによってアピールされていました。

オベーションの普及にひと役買ったスーパー・ギター・トリオ。

市販第1号機バラディーアの登場 ～イン・ブリッジPUの開発

現在オベーションのラインナップにはアコースティック・モデルは基本的に存在しないのですが、67年発表当時はまだPUは搭載されておらず、オベーションのエレアコの登場は2年ほどあとになります。チャールズと親交が深く、また最も早い時期からのオベーションの理解者でもあったカントリー・ギタリストのグレン・キャンベルの意見をきっかけにPUの開発や内蔵への試みが始まり、68～69年にはブリッジ・サドルの下部に圧電素子を組み込んだ形の“イン・ブリッジPU”が発表されています。コンタクトPUのハウリングに悩まされていた多くのミュージシャンにオベーションが急速に受け入れられた最も大きな要因はこのイン・ブリッジPUの効果だったことは間違いないでしょう。また、グレン・キャンベルの意見によってリード向きに低音を抑え高音を強調させる目的で独自のブレーシング“VT-8”や薄胴のシャロウ・ボウルも開発され、加えて優れた剛性の5ピース・ネックを配したアコースティック／エレアコそれぞれの仕様のグレン・キャンベル・モデルが誕生します。以降、バラディーア同様のXブレーシングを採用したカスタム・バラディーアや12フレット・ジョイント／スロッテッド・ヘッド（ガット・ギター系の糸巻式）のスティール弦のフォークロア、グレン・キャンベル・モデルと同様のVT-8ブレーシングのアーティスト、同ガット・バージョン（14フレット・ジョイント）のカントリー・アーティスト、12弦専用カ木のファン・ブレーシング（のちにさらなる強度を求め、T字ファン・ブレースを開発）を配した12弦ギターのベースメーカーや各モデルの12弦バージョン、ガット弦専用の2種類のブレーシングを使い分けたダブル・ファン・ブレーシングのクラシックとVT-10ブレーシングのコンサート・クラシック、のちのアダマスへの影響を感じさせる独自のAブレーシングを配したレジェンド、ステレオ・プリアンプ（偶数弦と奇数弦を左右に振り分けて出力する）を搭載したカスタム・レジェンドと急速にラインナップを充実させます。同時にアーティスト・サイドもジム・クロウチと彼のバック・ギタリストのモーリー・ユーライゼン（共に73年飛行機事故で他界しているので、ほんのわずかの時期ですが）、ブレッドのデヴィッド・ゲイツと愛用者は徐々に広がっていきます。

アダマス誕生

そのあともオベーションは革新的なギターを発表していきます。さらなる研究の末73年に、あのアダマスを完成します。チャールズ・カマーン氏のアダマス開発史によると新開発のおもなテーマは表板を従来の生ギターよりも薄くし、同時に強度を保つ（もしくは強度を高める）ことだったそうです。各音程における鳴りの強弱をより均一にし、さらに音量を多く得るための方法として、オベーションは過去の測定結果などから板厚を薄くすることに解決を求め、カーボン・ファイバーでバーチ（樺）材をサンドしたファイブロニック・サウンドボードを開発します。約0.13ミリのカーボン・ファイバー・シート2枚で木目に斜め60度の角度を持たせ0.9ミリのバーチ材をサンドしたファイブロニック・サウンドボードは、当初の目的であった優れた剛性を持つ1.3ミリの薄板を作ることに成功し、同時にサウンドホールを空けることによって生じる強度の低下を防ぐために表板上部を右11個ずつのエポーレットと呼ばれる分散されたサウンドホールを考案しています。またサウンドホールを表板中央からずらすことによって、より自由な力木形状が採用可能となり、幾度かの試作と測定のあと、9本の細棒から構成された独自のブレーシングを決定します。アコースティック・ギターのデザイン概念を根本から覆したアダマスの登場はまさにセンセーショナルなものでした。たぶん、日本で一番最初にお目見えしたアダマスはシンガー／ソングライターの南こうせつ氏がアメリカで購入したものだと記憶しているのですが、ブルー・サンバーストの一風変わったルックスを初めて見た時の衝撃は今でもよく憶えています。なおアダマスのごく初期のモデルはスロッテッド・スタイルのヘッド形状でポジション・マークも現在のものとは異なっています。

カマーン・バーの完成 ～廉価モデルの発表

77年には、画期的なトラスロッド、カマーン・バーが開発され、79年のモデルから導入されています。従来のトラスロッドよりネック・ヒール部まで深く挿入することで剛性を高めています。76年にはアメリカ建国200年を記念し、他のギター・メーカー同様アニバーサリー・モデルに取り組み、ブラウンステイン・スプルース・トップにアメリカ国旗を刷り込んだ上品な仕上がりのパトリオットと命名したモデルを1976台製作し、発売しています。さらにマトリックス、アニバーサリー、レジェンド・リミテッドとラインナップは増えていきます。日本でもオベーションは知られるようになり、78年にプロデュースされた廉価モデル、アプローズが79年頃から楽器屋店頭に並ぶようになります。徹底したコスト・ダウンで発売当時はアコースティック・モデルで¥65,000、エレアコ・モデルで¥85,000の価格を実現しています。当時のアプローズは現在発売中のシリーズとはまったく異なったスペックのギターでした。あとから貼り付けるタイプのロゼッティ（サウンドホール周辺の飾り）はなんとピックガードとつながった1枚板で、仮にピックガードを剥がすと一緒にロゼッティも取れてしまうというものでした。さらに衝撃的だったのはネック構造で、ネック本体と指板とさらにフレットまでがアルミ製の一体構造で（当然トラスロッドはなし）、当時のカタログには、フレットが摩耗したり不慮の事故で破損した場合の対応としてネック交換料¥20,500と記されていました。冬の寒い日などには木製のネックより冷えた感触だったのを思い出すと笑えたりします。当時の国産のエレアコといえば70年代後半に逆輸入の形で一部で知られていたタカミネが独自の構造のイン・ブリッジPU（パラスティックPU）と初のスライド式ボリューム、トーンをボディ・サイド胴部に搭載し日本発売を開始したばかりで、80年の末にモーリスが指板下にマグネティックPUをセットした（高級機種のみイン・ブリッジPUとのミックス仕様）ボウル構造の最初のトルネードを発売し、ヤマハがイン・ブリッジPU仕様（一部コンタクトPUとのミックス仕様あり）をラインナップしたのは81年の末のことで、オベーションの普及価格帯への参入はかなり早かったことになります。また、のちのフェンダーUSAとフェンダー・ジャパン、ギブソンとオービル、マーティンとシェナンド&シグマといった親ブランドの良いイメージを武器とするセカンド・ブランドへの取り組み方にも先取り観があったといえるでしょう。ただ、当時の風潮としてはエンドピン・ジャックでさえ嫌われるほどアコースティック・ギターへの加工には抵抗があり、プ

リアンプがボディ・サイドに取り付けてあるなど生音を重視するアコースティック・ギターとしての価値がないと判断されるような状況でアプローズも市場にはなかなか浸透しにくかったようです。

カッタウェイ・モデルの登場

現在ではエレアコにおいてカッタウェイ・ボディはスタンダードになっていますが、定着したのはわりと最近のことで、70年代後半カナダのアコースティック・ギターのラリビーあたりからだと記憶してます。多くのギター・ファンに衝撃を与えたアコースティック・ギター・インストの名盤『スーパー・ギター・トリオ・ライブ（原題：FRIDAY NIGHT IN SAN FRANCISCO）』がレコーディングされた80年、オベーションはレジェンドとカスタム・レジェンドのカッタウェイ・モデルを発表し、カタログにアル・ディメオラを起用しています。バンド・サウンドの中で従来のアコースティック・ギターの代用的に使われることの多かったオベーションが、新しく派生したアコースティック・フュージョンによってその特性を効果的に発揮したことは音楽と楽器の優れた関係を示しています。また、旋律楽器としての側面を強めたアル・ディメオラ、ジョン・マクラフリン、ラリー・コリエルら、革新的なアコースティック・ギター奏者たちにとって、オベーションにおけるカッタウェイ・ボディは必然的なものだったといえるでしょう。

カラー・バリエーションの充実化 ～アダマスII、エリートの登場

ビジュアルの面でもオベーションはエレアコ界をリードしていきます。オベーションは発売初期から表板のカラー・フィニッシュに取り組んでおり、バラディーアにはホワイト・フィニッシュがあり、次いでレッド・フィニッシュもラインナップしています。カラーで印象に残っているのは81年のサイモン&ガーファンクル再結成セントラル・パーク・コンサート時にポール・サイモンが使用したブラック仕上げのカスタム・レジェンド（当時は特注で製作され、のちにブラックもオプション・カラーとなっています）で、以降エレアコのブラック・フィニッシュは定番となります。これ以前にもギブソン・センチュリー、ヤマハL-52（のちにCJ-52）などブラック・フィニッシュはあるのですが、エレアコ→カッタウェイ→ブラックと一連の流れをオベーションが展開したことで定着して現在に至っているように思います。アルミ・ネック／ウォルナット指板のローコスト・モデル、マトリックスを発表した82年にはブラック・フィニッシュを標準仕様に加えています。また、コレクター・シリーズ（後述）の83年モデルで登場したバーンボード（シースルー・グレー＋ブラックのサンバースト）もオベーションの優れたビジュアル観を感じさせるものでした。強いインパクトを与えたデザインのアダマスも80年に若干価格を下げたアダマスIIのバリエーションを加え、同時期には木製（スプルース）トップ・バージョンのエリートを発表しています。87年には6連糸巻のシングル・サイド・ヘッドに文字どおりのカミナリ型のサウンドホールのサンダーボルトを発表しますが、エレアコが市民権を得たあととは言え、定着するには至らなかったようです。

コレクターズ・シリーズの発表

新たな試みとしてオベーションは82年から年ごとの限定モデルとしてコレクター・シリーズを展開します。毎年新たな試みやトレンドが投入されたギターが発売されており、毎年購入するコレクターもいるそうです（その財力には呆れたりしますが）。以下、年ごとの特徴に軽く触れてみましょう。82年モデル：アダマスで鮮烈な印象のあったブルー・サンバーストを初めてウッド・トップ

このモデルをきっかけにブラック・フィニッシュが普及した。

に採用。ステレオPUのディープ・ボウル・ボディ。なおコレクターズ・シリーズ中、ノン・カッタウェイ・ボディを採用したのはこの82年モデルだけで以後発表のモデルはすべてカッタウェイ・ボディとなります。83年モデル：リード・ギタリストをさらに意識したスーパー・シャロウ・ボウルのカッタウェイ・ボディにニュー・カラーのバーンボード・フィニッシュ。アル・ディメオラが当時愛用していました。84年モデル：アダマス系のエポーレットを配したウッド・トップのスーパー・シャロウ・ボウル・ボディ。シャーラー製の糸巻にはエボニーのツマミが使用されており、カラーはブラック・スティン。85年モデル：前年モデルと同じくスーパー・シャロウ・ボウルに新開発のプリアンプOP-24（後述）を搭載。OP-24は以降93年モデルまでの共通プリアンプとなります。カラーはブラウン系のオータム・サンバーストで12弦モデルもあり。86年モデル：当時のエレクトリック・ギターのトレンドを意識したジャンボ・フレット仕様に無限大を表わす印象的なインフィニティ・ポジション・マーク（∞）。パール・ホワイト・フィニッシュにブラック・パーツで統一されたオベーション創立20周年モデル。前年同様に12弦モデルあり。87年モデル：エポーレット仕様、ディープ・ボウルのボディにメキシコ貝インレイ装飾を施した豪華なモデル。色はシースルーのハニー・カラー。88年モデル：再びスーパー・シャロウ・ボウルに戻り、プレイアビリティをテーマにした結果、ジャンボ・フレットに16フレット・ジョイント・ネックを採用。アダマス系のエポーレット飾りは黒に白線のモノ・トーン。金属質を思わせるプラチナム・フィニッシュ、クロームメッキ・パーツはLAメタル・シーンを狙ったものと思われる。カタログには当時ポイズンのギタリストであったC.C.デヴィルがモデルで登場。89年モデル：サンダーボルト・モデルにも採用されたコンコルド・ヘッドを有した16フレット・ジョイントのネック、ラウンド・ホールのスーパー・シャロウ・ボウル・ボディ仕様。薄胴にエレクトリック・ギター系のシングル・サイド・ヘッドとロック色の強いギターで、カラーはブルー・メタリック。90年モデル：ナツメグ・カラーのバーズアイ・メイプルをトップに採用したギターで、ネックは16フレット・ジョイント。ディープ・ボウルとスーパー・シャロウ・ボウルの2種の仕様が入手可能。91年モデル：オベーション創立25周年を記念し、第1号モデルであるバラディーアの当時の仕様（Xブレーシング、ソリッド・スプルース・ナチュラル・トップなど）を基本にカッタウェイなど若干のデザイン変更とOP-24プリアンプを加えたモデル。ロゼッティには過去のアニバーサリーとほぼ同じデザインが採用されており、当時の仕様どおりディープ・ボウルのみ。92年モデル：トップ材にアッシュの類似樹木タモ・ウッドを使用した美しい木目のハニー・フィニッシュ。スーパー・シャロウ・ボウルのみ。93年モデル：艶消しフィニッシュのスプルースをトップに使用したシャロウ・ボウル仕様。マホガニーにパドゥークとエボニーを挟んだ5ピース・ネックや、これまでのモデルより細いタイプのブリッジ・サドルを採用するなど、一見オーソドックスながら視点を細部に向けた意欲作。このブリッジ・サドルは仕込み角を15度後傾させることで、弦の圧力をPUにより効率よく伝えている。94年モデル：9年ぶりに登場したニュー・プリアンプ"オプティマ"（後述）を搭載した話題作。その他でも最近のハンドメイド・ギター・ビルダーが用いる手法を意

北陸唯一、フルオーダーメイド専門店

ハカランダ：
ワシントン条約で
輸入禁止指定材。

当店では輸入禁止以前に在庫したハカランダセンター2Pの、なんとBody材を、限定1枚ストックしています。

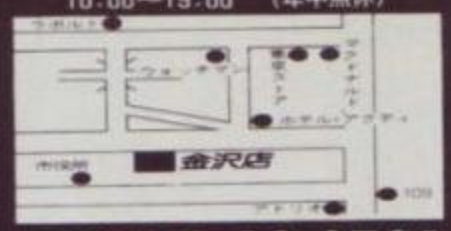
その他、貴重なレア材など、様々な材を200枚以上在庫。シーズニングもバッチリ。

無料で見積りします

ESP PROCEED

アフターサービス万全!!
当店でオーダーメイドされた方に万全な保証、ギター保険に加入できます。

Big Boss 金沢店
ザ・カスタム
10:00～19:00　（年中無休）



☎0762-32-0701
FAX 0762-32-0706
石川県金沢市広坂1-3-7

TALK ABOUT OVATION GUITARS

徳武弘文

●初めてオベーションを弾いたのは何年前ですか?
○約20年くらい前だと思う。ヤマハ池袋店にて。

●使うきっかけは?
○使うきっかけというより、ジェリー・リードの音が欲しかったから待ち望んでいたものでした。

●最初に買ったオベーションのモデル名を教えてください。
○カントリー・アーティスト・モデル。

●初めてオベーションを弾いた時の印象は?
○まさにこれがジェリー・リードのエレガットの音!

●現在、何本オベーションを使っていますか?
○今はエレガット1本のみ。以前はオベーションのエレキ・ギターも含め3本ほどありました。

●一番よく使うモデルは?
○カントリー・アーティスト・モデル。

●ライブとレコーディングではどちらで使用しますか?
○今はレコーディングが中心です。

●ライブとレコーディングでの使用法を教えてください?
○ライブではライン。そのままPAに送っています。レコーディングではラインか生音をマイクで拾うかのどちらか。一緒にミックスというのも昔はやってましたが今ではやりません。

●サウンドホールは、ラウンドとエポーレット・タイプがありますが、どちらが好きですか?
○ラウンド・ホール・タイプ。

●カッタウェイ・タイプとノン・カッタウェイがありますが、どちらがお好みですか?
○私が買った時代はカッタウェイのものなどなかったです。

●ボディの厚さはディープ、シャロウ、スーパー・シャロウと3種類ありますが、どのタイプがお好きですか?
○シャロウ・ボディ。

●今、欲しいモデルとかありますか?
○特になし。

●ずばりオベーションの魅力は?
○ギタリストにとってある意味でエレキ・ギターとアコースティック・ギターとの境を少なくしてくれたと思います。ギブソンともマーティンとも違うし、木の生音でもない。オベーションはまったく新しい音でした。私がグレン・キャンベル・モデルを買った頃は、"安くするよ"と言われたくらいだから、当時の人気は今ひとつであったようです。私は自分のバンド、ラスト・ショウのレコーディングで喜んで使っていました。今となってはエレクトリック・アコースティック・ギターは常識的な存在となっていますが、これもオベーションが出現したおかげでしょう。

識したロゼッティ・デザインやダイレクト・ボックスを内蔵したXLR端子(3ピン・キャノン)の採用など新しい試みが随所に見られる。

エレアコの後発商品の台頭

80年代後半の登場以来、エレアコ・シーンをリードしてきたオベーションも80年代に入ると日本製ギターを中心とする後発商品の登場により、低価格帯ではアプローズ、セレブリティらのラインナップで対抗するものの、さすがに独走体制ではなくなってきます。例えば85年に発表されたOP-24プリアンプと当時の他のエレアコのプリアンプを比較した場合、イコライザー機能などのファンクションで見ると各社とも均衡していましたし、最近採用された008Pバッテリーの外からの脱着も日本のギター・メーカーによってかなり前から行なわれていました。またオベーションのラウンド・バック構造やアダマス・エポーレットのような特異なスペックが浸透する一方、たとえエレアコでもアコースティック・ギターにはウッド・ボディのバック&サイドを求め続ける傾向もあり、特に日本ではオベーションの普及によって他のアコースティックが触発され、オベーション以外の選択肢(後発のエレアコ・メーカー)も広がりました。元来アコースティック・ギター1本の弾き語りから派生したニュー・ミュージックなどのボーカル系では次第にコンパクト・サイズにリファインされた箱モノ構造のギターへの移行が見られるようになります。さらにアコースティック・ギターと密着した音楽の分野でも変化が起こってきます。前出のスーパー・ギター・トリオらに代表されるアコースティック・フュージョンへのオベーションの貢献は誰もが認めるところでしょう。ただその後、この分野の定着とは別にエレアコ・サウンドのトレンドは"木の鳴り"に向かい、80年代半ば頃からブームとなったウィンダム・ヒルに代表されるニューエイジ・ミュージックは、格段に進歩したEQやリバーブ、コーラスといった空間系のエフェクト機材によるスタジオでの音の創造を方向づけ、エレアコのPUも専用マグネティック、コンタクト(貼り付け型)ピエゾ、マイクロフォン採りや複数方法の併用など多岐にわたるようになってきています。さらにそれらの新しい手法はPA環境の進歩によりライブでも再現されるようになっており、オベーションも独壇場とは言い難く、さらに革新的な開発を迫られ、激しい競争状況におかれるようになります。

オベーションの新たな試み~最近の動向

一方、十分なアピール性を持ちながら短命に終わったモデルもあります。88年発売のシャドウのOEMによるGTM-8MIDIコンバーター対応のMIDIギターは、当時としてはかなりの自由度を持っていたにもかかわらず、多くの人に認められるには至りませんでした。DTMが今日のように身近ではなかったためギター・シンセサイザーへ高い関心を持つユーザーが少なかったことに加え、それまでに発売されたエレキ系ギター・シンセの完成度への疑問(トラッキングのミスや遅れ)、高額であったこと(最低価格でセット¥638,000)など、ギター・シンセを取り巻く状況は厳しいものでした。次いで87年に発売された直線を多用したロック向けデザインのサンダーボルト・モデルも、カミナリを模したサウンドホールが印象的だったものの、過去にアダマスが発売された時のような衝撃は人々に与えられなかったようです。88年にはコレクターズ・シリーズに16フレット・ジョイント・ネックを採用し、他のギターにないプレイアビリティを打ち出しますが、残念ながら大きな話題になるほど関心を持たれるには至らなかったようです。この16フレット・ジョイント・ネック仕様などはフォーク・ギターで多用されるロー・コード・フォームで12フレットをナット(=0フレット)と仮定して押さえたりすると通常のオクターブ上の音程が容易にミックスできるので、ナッシュビル・チューニング(12弦ギターの補弦=各コースの細い弦だけを6弦ギターに張るので通常より3~6弦は1オクターブ高くなる特殊チューニング)に似た効果が簡単に得られるなど、奏法上の可能性をも秘めていました。それだけに人々からあまり注目されなかったのは残念です。

エレアコが完全に市民権を得た感の80年代後半、後発エレアコや専用PU&プリアンプによるサウンドの個性化の中、センセーショナルな発売以来から独自のサウンドを推し進めてきたオベーションに、最近急速に新しい動きが見え始めました。今年1月のNAMMショーでは今までにないロゼッティ・デザインに、実に9年ぶりのニュー・プリアンプ"オプティマ"を搭載した94年コレクターズ・シリーズを発表しました。オプティマ・プリアンプには周波数固定式ながら2バンド構成となったミッド・トーン・コントロールを含む4トーン・コントロール、対ハウリング用の周波数可変タイプ・ノッチ・フィルター、外部機器での音作り(=プリアンプ、各種EQ、マルチ・エフェクターのEQセクションによる音作りや音色切り替え)をしやすくするために、本体のトーン設定に影響されないライン音を出力するEQバイパス・スイッチに加え、クロマチックのチューニング・メーターまでもが従来のOP-24プリアンプと同サイズに納められており、そのスペックは、必要かつ十分な充実ぶりで世界のトップ・レベルへ立派に返り咲いています。また同ショーではカマーン・グループ傘下のヘイマーとオベーションのコラボレーションによるマホガニー材を使用した薄胴エレクトリック・ギター風ニュー・ボディ・デザインの"ヴァイパー"も発表されました。今後も大いに期待できそうです。

●阪急交通社オベーション工場見学ツアーのお知らせ

"アメリカン・ギターとブルースの源流を訪ねて"と銘打つこのツアーは、オベーションとヘイマーの工場見学を観光プログラムに盛り込んだところが魅力だ。シカゴ~メンフィス~ハードフォード~ニューヨークを回り、メンフィスではサン・スタジオ、ブルース博物館、B.B.キング・ブルース・クラブも案内してくれる。
旅行日程:8/23~8/30
旅行代金:¥298,000
問阪急交通社・千葉支店☎043-225-1125(担当:スガイ/イトウ)

●撮影:大橋一実:P.52~56 ●、❶、❷、❸、❹、❺、❻、Head, Neck, Position Mark, Sound Hole, Bridge, ❼、❽、❾、❿
P.58~64(Photo of"OVATION SECRET.":#2、#3、#4)

●ギター提供者:さだまさし:P.52 ❶
G7GUITARS:P.53 ❷
平松明紀:P.53 ❸
スマッシュ・ヒッツ:P.56 ❹、❺、❻、❼

●資料提供:寺崎誠
●取材協力:中元貿易(オベーション・ギター日本総代理店)